

自分と他者を大切にし、認め合う人権教育の推進

新十津川町立新十津川小学校 学級数 18 (校長 坪江 潤)

I 実践テーマの趣旨

本校では、全ての児童が安心して学び、互いに認め合い、成長できる学校を目指して、組織的な教育活動を推進するとともに、自分と他者を大切にできる児童の育成をねらいとした生徒指導により、人権意識の高揚に視点を当てた学校づくりを推進している。

II 実践の内容

1 児童が主体となって取り組む仲間との絆づくり

本校では、学校が児童にとって一つの社会であると捉え、児童一人一人の人権が尊重され、安心して過ごすことのできる場となるよう、教育活動全体を通じて人権教育を進めている。

特に、人権尊重の推進に向けては、児童の気付きや問題意識について児童間で共有し、取組の改善を図ったり、新たな取組を行ったりするなど、児童が主体となって実践することができるよう努めている。

令和4年度は、児童会役員選挙で立候補した児童が提案した「仲間との絆づくり」を、「あいさつ運動」や「いじめ撲滅の活動」等の取組として、児童の意見を基に実施した。

また、児童一人一人に、友達のよい面を認め合う気持ちや積極的に伝える姿勢が育っており、自分のよさや可能性を日常的に認識するとともに、他者を価値ある存在として尊重し、協働して学校生活を送ることの大切さを体験的に学ぶことにつながっている。



【児童のよさを積極的に伝え合う様子】

2 児童の不安や悩みを決して見逃さない積極的な生徒指導

本校の生徒指導は、初動を大切に、組織的な対応を貫徹している。問題行動の解決に向けた指導に加えて、児童の成長を促すことを目的とした指導や、問題行動等への予防的な指導についても、「積極的な生徒指導」として全教職員で共有し、「児童の側に付く指導」や「定期的な全児童との面談」を日常的に実施し、児童の不安や悩みを決して見逃さず、自他を大切にできる児童の育成を目指した生徒指導に取り組んでいる。

3 思いやりを育てる人権教室の実施

新十津川町在住の人権擁護委員を講師に招き、第4学年児童を対象とした「思いやりを育てる人権教室」を実施している。コロナ禍以前は、実施日を参観日に設定し、保護者も対象に加えた「親子で学ぶ人権教室」を開催していた。講師の講話から、「いじめは、一人の暴力的な人間が、一人のひ弱な人間に暴力を振るうという単純なメカニズムではない」ことを「心のスイッチ」と題した詩と「私のせいじゃない」と題した絵本を基にして考え、深めていく学習を行った。講話での学びから共感したことや感じたことについて、児童同士が互いに感想を述べ合うことを通して、互いに認め合うことの大切さについて自分の考えをより深めることにつながった。

4 地域協働による人権教育の推進

本校では、地域との連携・協働により、日々の児童の安心・安全を守る活動を進めている。また、学校の教育活動を支える地域の方との日常の触れ合いも大切と考え、児童と地域が日常的に積極的に関わることでできる取組を進めている。具体的には、児童の人権を支える保護司会の協力により、第1学年の花壇整備に関わっていただくなど、多様な地域の方々との関わりを通じて、児童が地域の方を知り、よりよい関係を醸成する機会となっている。



【保護司会の方々

花壇整備をする様子】

III 成果 (○) と課題 (●)

○ 「つなぐ・そろえる」を合言葉に、学校全体で日常授業の充実及び積極的な生徒指導など、人権意識を高める取組を進めたことにより、児童の自己肯定感が高まり、落ち着きのある、活気に満ちた学校づくりにつながった。

● 児童の不安と悩みを決して見逃さないよう、児童がいかなる環境にあっても、教職員が必ず寄り添うことができる組織体制を継続するなど、一人一人の児童を大切にしたい人権教育を一層推進していく必要がある。

中学校における人権教育推進の在り方を探る ～広い視野に立ち心豊かで思いやりのある生徒を求めて～ 幌延町立幌延中学校 学級数5(2) (校長 小野 篤夫)

I 実践テーマの趣旨

本校では、これまで取り組んできた学習を「人権」という視点で整理し、各活動をつなげることで、組織的な実践を積み重ね、自他の大切さを認識するとともに、自尊感情や自己有用感を高め、人権意識の高揚につなげていくこととした。実践を推進する上では、家庭や地域社会、関係機関との連携が必要であり、家庭や地域の協力を得ながら取組を推進している。

II 実践の概要

1 関係機関や外部講師との連携・協力を図った取組

(1) 世界規模の視点から考えたSDGsワークショップの実施

「2030 SDGs」公認ファシリテーターである describe with 代表高橋優介氏を招聘し、SDGsカードゲームを使用したワークショップを実施した。

ワークショップでは、異なる価値観や違う目標をもつ仲間しかいない世界の設定の中で、個人のミッションを達成しながら、どのように持続可能な世界を実現していけばよいのかを体験し、SDGsに関する理解を深めた。また、ゲームを活用したことにより、生徒の目標達成のためのリーダーシップやコミュニケーションスキル、チームビルディングスキルの醸成を図るとともに、SDGs17の目標をより深く意識させることができ、人権の視点から考えを深めることができた。



【ファシリテーターの高橋氏】



【ワークショップの様子】

(2) 国立アイヌ民族博物館の学芸員と連携した学習の実施

3年前の修学旅行から、白老町にある「ウポポイ(民族共生象徴空間)」にある国立アイヌ民族博物館の学芸員と連携した学習を展開している。学芸員と連携したオンラインによる事前学習では、「わたし(生徒自身)」と「アイヌ民族」の生き方を対比させた授業を行い、生徒の課題意識を高めた。

施設見学当日は、「アイヌ民族はどんな歴史や文化の中で生きてきたのだろう」という課題を踏まえて見学し、振り返りとして「わたし(生徒自身)はどんな文化の中で生きていくのだろう」の視点で自分なりの考えをまとめた。



【事前事後のオンライン学習の様子】

オンラインによる事後学習では、アイヌ民族と関わりの深い人物の「生き方」について振り返り、多様な文化が共存する人生について、「どのような価値観や生き方、文化を大切に生きていくか」考え、まとめることができた。

(3) LGBTQを理解するための教職員研修の実施

宝塚大学教授日高庸晴氏を招聘し、学校におけるLGBTQの存在を意識した取組等について、理解を深める教職員研修を実施した。校内で合意形成を図ること、次年度の年間計画に研修を位置付けること、学校現場で実施可能な取組7項目の実施等、学校の取組を一歩前へ進めていくことについて意識を高める機会となった。



【教職員研修の様子】

2 生徒会を中心とした取組

生徒会を中心となった挨拶運動や人権の花の取組、絆づくりコンクールへの参加など、外部や地域との連携・協力を意識した活動を展開している。また、教科横断的な視点で教育課程を編成し、中学校3年間を見据えたストーリー性をもたせた取組を通して、人権教育の推進に係る工夫・改善に努めている。



【人権の花の作業の様子】

III 成果(○)と課題(●)

- 本校が掲げた目指す学校像「日本一温かな学校」を意識し、相手や仲間のことを考えた活動ができる生徒が増えるとともに、生徒の自己有用感や人権意識の醸成につながっている。
- 生徒に身に付けさせたい資質・能力を改めて明確にし、指導の体系化を図る必要がある。